

全カリの授業を受けて…

長坂 裕美

大学で学んだことって何だろう。

学生時代を振り返ると、私の記憶に残っているのは全学共通カリキュラム、通称‘全カリ’だ。一般教養として、人文・社会・自然など各分野に様々な授業が用意され、身近な社会現象から宇宙の科学に至るまで、幅広い選択肢が私たち学生に提供されていた。キリスト教思想を考えるために遠藤周作の小説を題材にしたものや、文化人類学ではサルからヒトへの進化をたどり、遺伝子についての授業ではイギリスの狂牛病の事例が紹介された。後日、日本でその発症が確認されたときは非常に驚き、予期せぬところで学んだ知識が役に立った。学部の専門科目よりも真剣に履修の時間割を考えていたほど好奇心をそそられる科目が多々あった。

履修した全カリ科目のなかで、印象に残っているのは「社会科学演習」（経済学部 鈴木秀一教授）だ。教授が教壇に立ち学生に対して一方的に講義を展開するのではなく、学生と同じテーブルにつき同じ目線でディスカッションをする、ゼミのような少人数での授業形態だった。議論の途中で、相

互の意見が平行線のまわき道にそれてしまったようなときは、それとなく軌道修正し方向性を示してくれた。

取り上げたテーマは、他国籍企業の組織運営の在り方や、ハンチントン教授の「文明の衝突」などであった。偶然にも、ちょうどアメリカで同時多発テロが起こった時期だった。はたして同時多発テロ＝文明の衝突なのだろうか。異なる文明は対立し反発しあうものなのだろうか。大きな議題となった。社会科学演習のなかで、この「文明の衝突」について議論を進めることになった。文化の違いを乗り越えて、いかに相互理解を図っていくべきかを考える良い機会だと思った。

私たちは、まず文明や文化という側面から考えてみることから始めた。日常生活では意味など考えることなく何気なく使っているが、そもそも文明って何だろう。文化との違いはどこにあるのか。受身ではなく自ら主体的に授業に参加することによって、次々と疑問が湧き上がってきた。物事に対してなぜだろうという好奇心を持ち探求していく、素直に学ぶ楽しさを実感する

ことができた貴重な体験だった。1年生から4年生、文学部や社会学部、経済・法学部など、学年も学部も異なる学生同士の多様な考え方や価値観を見聞きすることによって、自分の意見を形成するきっかけともなった。興味や関心を抱きやすいリアルタイムなトピックを取り入れた授業も新鮮だった。

大学を卒業し社会人となりもうすぐ一年が経つ。学生時代、全カリアくまで一般教養であり仕事をする上ではあまり役に立つものではないのではないか。そんな思いが多少はあった。専門科目は専門科目、教養は教養というように縦割りに区別して考えていたからだ。しかし、実際に社会に出ると縦割りの区別など意味はなく、様々な分野が絡み合っ社会が動いていくことを感じた。例えば法律の仕事をしていても、経済や経営、歴史や語学、コミュニケーション能力など、必要とされることが少なくない。法律だけ知っていても仕事はできない。ひとつひとつの社会現象が密接に関連しあっている。だからこそ、今起こっている出来事をたった一つの視点から見ると、複数の多角的な視点から捉えたほうがより合理的に理解できるのかもしれない。そのためには、複数の教養が土台としてあれば、理解の一助となるはずである。何かを追求するときにも、思考に深みや幅ができるし、偏った思考にならないのではないか。バランスよく幅広い視野で考えることができ

る。そのための基礎を全カ力で身に付けることができたのではないかと思う。ここで学んだことは、自分自身がこれからの人生のなかで直面する数多くの難問に対して、解決への手掛かりを与えてくれるものになるのではないだろうか。

今はまだ実感できることは少ないが、私にとっては価値のある、いつか必ず大きな財産となる経験だったと思う。大学での講義は、ともすると大学側が学生に対してただ単に用意したものの、学生からの立場でみると受身的な側面が強かったように思う。全カ力ではたくさんの科目数や多様な授業内容のなかから、自ら主体的に興味や必要に応じて自由に選ぶことが可能であったので、受身というよりは少なくとも積極的に学ぼうという姿勢で臨んだ。授業を受けるだけではなく、参加している意識がないと面白いと感じることはできないし、またコミットしているという意識があれば、より良い授業を作り上げようとする気持ちが学生側にも生まれる。そして、学問を学ぶ楽しさを改めて知ることができた。

教養科目にこれほど力を入れている大学は、他ではあまり見られないのではないだろうか。立教大学の特色として、これからも続くものであってほしいと思う。

ながさか ゆみ

(本学法学部政治学科2001年度卒業)